長野市の埋蔵文化財第73集

松　代　城　跡

――国補神田川改修事業地点――

1995.3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに物の豊かさから心の豊かさが求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の知恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけでなく、現代の文化の在り方を見つめ直すうえでも鍵となる貴重な国民共有の財産であります。

このたび、長野県長野建設事務所主管の神田川改修事業に伴う発掘調査を平成4年度から6年度にかけて実施いたしました。

事業計画地は国史跡松代城跡と深くかかわりのある花の丸御殿跡の西端と桜の馬場の推定地にあたり、松代城の縄張り確認のうえで重要な役割を有していました。

本書はその成果を要約し「長野市の埋蔵文化財第73集」として報告いたします。この報告書が松代城研究の再認識や保護の一助として、関係各方面に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご援助・ご指導をいただきました関係諸機関ならびに各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

長野市教育委員会
教育長　滝澤忠男

例　　言

1　本書は、長野市長塚田　佐と長野県長野建設事務所長紅粉　彰との協定書および委託契約書に基づく、国補中小河川神田川改修事業に伴う緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。ただし、調査の実際は社会教育課が対応した。

3　調査地は、長野市松代町256－1他に所在し、保護対象面積は約2,000㎡である。

4　本書は、発掘調査で検出された基本資料を提示することに重点をおいた。

5　遺構測量は平面直角座標第Ⅷ系座標値と日本水準原点の標高を基準として、コーデックシステムを援用するため㈱写真測図研究所に委託した。

6　遺構図は統一した縮尺になっていないため、スケールを参照にされたい。遺構断面図の数値は、標高350m＋数値cmを表す。遺物実測図・拓影図のうち焼物類を1：3、瓦を1：4および1：8の縮尺で提示した。

7　焼物類の断面が粗アミ掛けのものは土器類、密アミ掛けのものは陶器類、白抜きのものは磁器類を表す。

8　焼物類の産地同定および年代については市川隆之氏（㈱長野県埋蔵文化財センター調査研究員）の教示を受けた。

9　掲載図中、ＳＫ（土坑）・ＳＤ（溝跡）・ＳＪ（土壙墓）の遺構略号を用いた。

10　写真プレートの番号は、実測図・拓影番号と一致する。

11　遺跡の略号はＭＣＫである。

12　調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

序・例言・目次

Ⅰ　調査の経過……1

1　調査の経過……1

2　調査日誌（抄）……1

3　調査の体制……2

Ⅱ　調査地周辺の環境……3

Ⅲ　遺構と遺物……5

1　松代小学校校庭地点（平成４・５年度）……5

⑴　石積み……5　⑵　溝　址……8　⑶　土　坑……8

2　花の丸地点……10

⑴　溝　跡（堀跡）……10　⑵　土壙墓……17

Ⅳ　結　　語……18

挿　図　目　次

1図　長野市防災基本図地形分類図 …… 3
2図　縄張図と調査地(左隅斜線部) …… 4
3図　松代小学校校庭地点遺構分布図 …… 5
4図　石積み・溝址・土址実測図 …… 6
5図　石積み・胴木列立面実測図 …… 7
6図　花の丸地点遺構分布図 …… 10
7図　12号溝址(百間堀)実測図 …… 11
8図　13号溝址実測図 …… 12
9図　12号溝址出土焼物実測図 …… 14
10図　12号溝址(20～30)・13号溝址(31～39)・土壙墓(40)出土焼物実測図 …… 15
11図　3号溝址(41～49・51～53)・12号溝址(50・54・55・58)・13号溝址(56・57)
出土瓦拓影・実測図 …… 16
12図　土壙墓実測図 …… 17

Ⅰ　調査の経過

1　調査の経過

平成４年12月24日　長野県長野建設事務所、長野県教育委員会文化課、長野市教育委員会社会教育課・埋蔵文化財センターによる保護協議を実施する。協議の結果平成４・５年度に松代小学校校庭西端部の調査、６年度に花の丸御殿跡（以下、花の丸と称す）の調査を実施することに決する。調査の実施にあたっては国史跡松代城跡に関与するものであり、将来の史跡追加指定にむけて縄張等の資料を得る必要から社会教育課が対応することになった。

平成５年１月13日付　埋蔵文化財に関する協定書を締結する。

１月11日付　文化財保護法（以下「法」という。）57条の３第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出がある。

１月25日付　法第98条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」提出する。

２月２日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

３月１日～４月30日　発掘調査を実施する。

５月６日付　長野県教育委員会教育長・長野建設事務所長宛「発掘調査終了届（通知）、長野南警察署長宛「埋蔵文化財の拾得について（届）」、長野県教育委員会教育長宛「埋蔵文化財保管証」をそれぞれ提出する。

平成６年３月31日付　長野県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

４月８日付　法第98条の２第１項の規定に基づく書類を提出する。

４月27日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

５月９日～７月14日　発掘調査を実施する。

７月21日付　「発掘調査終了届（通知）」「埋蔵文化財の拾得について（届）」「埋蔵文化財保管証」を関係機関に提出する。

８月18日付　「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

平成７年３月30日　発掘調査報告書『松代城跡―国補神田川改修事業地点―』を刊行する。

2　調査日誌（抄）

平成５年３月１日～４日　重機とダンプトラックによる表土除去作業。

３月５日～８日　神田川上流域の試掘坑による遺構確認調査。調査地盤面の土層観察。

３月10日～19日　１・２号石積みの追及。平面・立面実測図作成。

３月19日～23日　石積み解体。胴木取り上げ。

４月19日・20日　重機による下層面露呈作業。

４月21日～23日　遺構検出・掘り下げ作業。

４月26日　遺構掘り下げ作業終了。各遺構・全体写真撮影。発掘調査機器材撤収。

４月27日～30日　遺構測量・平面図作成。現地における

Ⅰ－１　平成５年３月22日

作業終了。

平成6年4月9日・10日　表土除去・トレンチ調査開始。

4月16日　遺構検出・確認作業開始。

6月1日　重機掘削開始。 3日　遺構掘り下げ作業開始。 9日　重機掘削作業完了。

6月17日　SD12掘り下げ作業完了。写真撮影。 28日　遺構測量。

7月4日　SD13掘り下げ作業完了。写真撮影。 8日　遺構測量。SK13完掘。

7月11日　発掘作業終了。調査機器材撤収。

7月13日・14日　遺構測量・平面図作成。サンプル採取作業。

I－2　平成6年6月6日

3　調査の体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　奥村秀雄（H4・5）・滝澤忠男
教育次長　小林丈志（H4・5）・柄沢　滋
教育次長副任　宮下富夫（H4）・伝田長男
社会教育課長　今井克義

総括管理者　埋蔵文化財センター所長　小山　正（H4）・荒井和雄
主幹兼所長補佐　鈴木貞男（H6）

庶務係　所長補佐兼庶務係長　山中武徳（契約・経理庶務）
職員　青木厚子（経理庶務）

調査係　係長　矢口忠良（報告書編集・執筆）
主査　青木和明（調査事務）
主事　風間栄一（遺物写真・版組）
主事　千野　浩・飯島哲也・小林和子

調査担当　社会教育課主事　前島　卓（主任調査員・遺構写真・執筆）
主事　山崎佐織（調査員・遺構図作成）

特別調査員　信州大学医学部第2解剖学研究室　西沢寿晃（人骨鑑定）

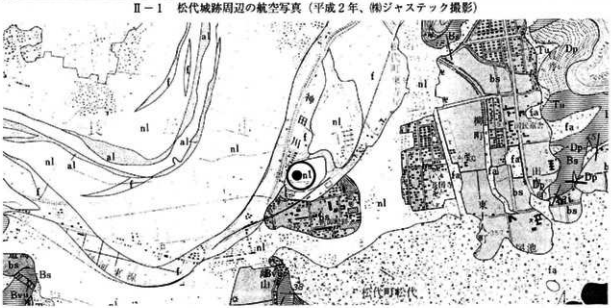
臨時調査員　矢口栄子（遺構図整図）・青木善子（遺構・遺物図浄書）
明治大学文学部学生　上原裕美（遺構図作成・SD12遺物実測）

調査作業員　池田賢二・市川君男・伊藤好明・今井和夫・大平秀治・窪田節子・小林利男・五明志の・島津一栄・関谷きく・真島成代・丸山　清・溝端広子・宮崎幸木・宮下るい子・宮原紀夫・村松正子・山岸　元・横田文雄（以上平成5年）　青木幸子・池田京子・市川君男・伊藤好明・今井和夫・窪田節子・五明志乃・島津一栄・関屋きく・中沢元子・中島　勁・深沢要作・溝端広子・宮崎さちき・宮下るい子・宮下保子・宮原紀夫・山岸　元・横田文雄（以上平成6年）

整理作業員　青木幸子・池田京子・中沢元子・松沢ナオエ

Ⅱ　調査地付近の環境

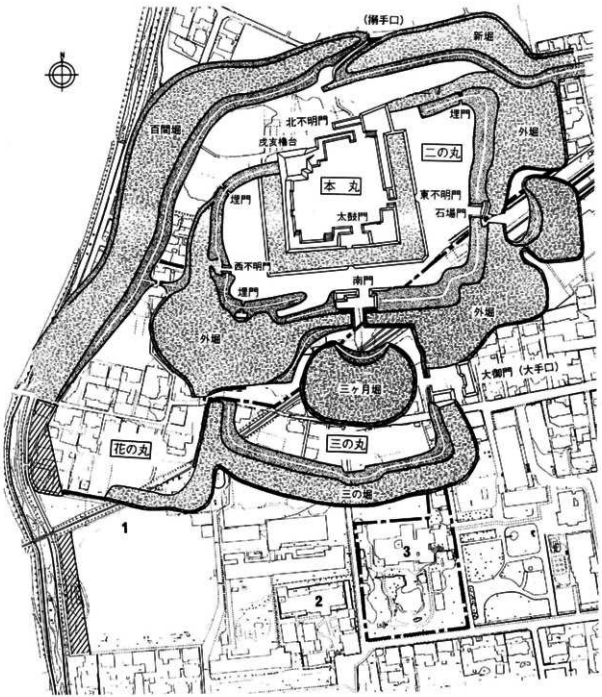
Ⅱ－1　松代城跡周辺の航空写真（平成２年、㈱ジャステック撮影）



nl 自然堤防　bs 後背湿地　f 谷底平野・氾濫平野（旧流路）

１図　長野市防災基本図地形分類図（１：25,000）

長野市防災基本図地形分類図によれば、本丸は自然堤防上に位置し、新御殿跡や旧文武学校は後背湿地に建築されている。花の丸の南西部も後背湿地内にあるとされている。しかし、現況図（１図）を参考にすれば神田川西の千曲川旧流路との比高差は２m近くあり、微高地と考えた方がよい。松代城はもともと千曲川を要害として築造されたものであるが、寛保の洪水（戌の満水、1742年）を機に千曲川の改修が行われ宝暦元年（1751）現在の流路をとして完成をみた。旧流路は百間堰・神田川の流路として現在に至る。松代の市街地は自然堤防と神田川と藤沢川の複合扇状地上に形成されている。



1 桜の馬場　2 旧文武学校　3 新御殿跡（真田邸）

2図　縄張図と調査地（左隅斜線部）

（縄張図『史跡松代城附新御殿跡一整備実施計画書』より転載、1：3,000）

調査地は、松代小学校校庭西端と花の丸の南西隅部に位置する。松代小学校校庭の北側は桜の馬場と呼ばれる施設があったところで、遺構の残存は馬場周囲を囲む土塁の存在が予想される。花の丸は明和7年（1770）5代幸弘の時に度重なる洪水被害から逃れるため居住地を本丸から移され、花の丸御殿と呼ばれた。調査地周辺にあたる御殿の西側は庭園が築かれ、建築物としては4畳半の小規模な信玄茶屋が造られた記録がある。隣接する西面には百間堀が掘り込まれている。現在両調査地の間を大正11年に長野電鉄河東線が開通しており、この時期には三の堀の大部分が埋没していたものと思われる。

Ⅲ　遺構と遺物

1　松代小学校校庭地点

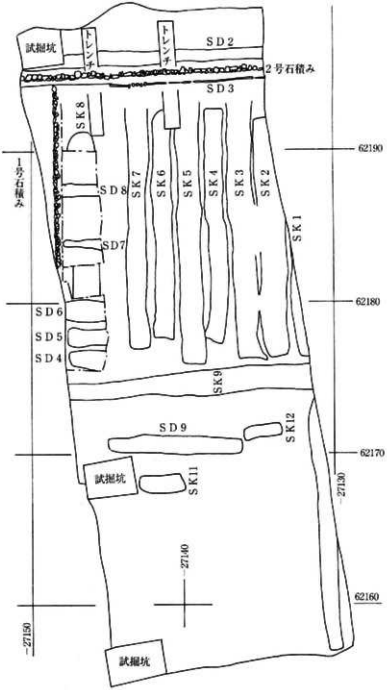
平成４年度に５か所のテストピットを設定し、重機を援用して土層等を観察した結果遺構の存在が予想される北側の半分ほどを調査することにした。土層は現地表下70～80cmが校庭造成による盛土がなされ、以下15cmの厚さで褐色粘質土・20cmで灰褐色粘質土になる。しかし、これらの層序は後に土坑の項で述べるとおり廃絶後の自然堆積ではないことに注意する必要がある。調査で検出した遺構は２列の石積みと石積み上面での９条の溝址、下面での土坑12基・２条の溝址がある。

(1)　石積み

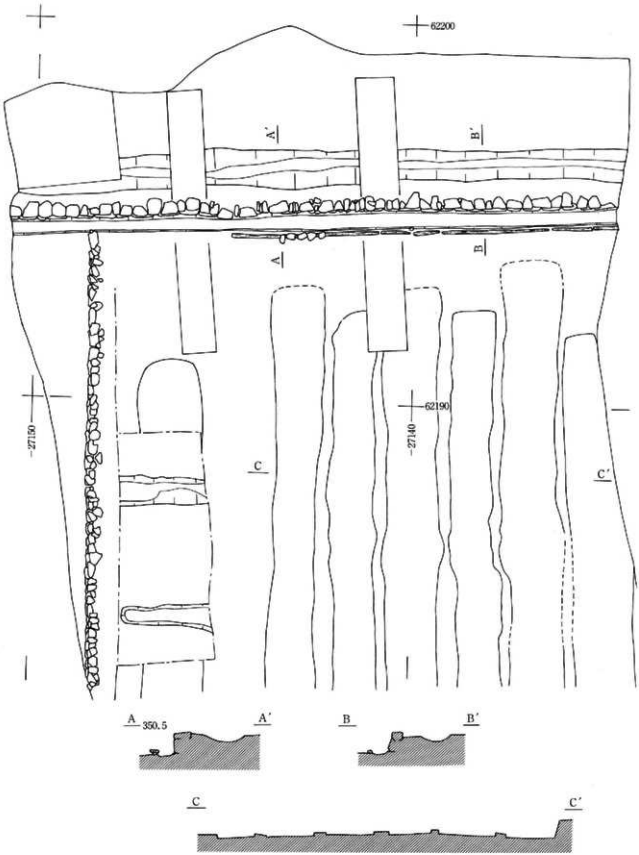
１号石積み（４・５図）　現地表下約1.1mの深さから検出され、南北方向の石積みである。２号溝址と直交形態にあるが、３号溝址を挟み接続しない。南端は調査区域外に延びる様相を示しているが、根石が確認できないことにより終結しているものと考えてよさそうである。確認した長さは12.2mを測り、立面の高さは45～35cm程の規模になる。石積みは横木と留坑による簡易な胴木を敷き、その上に上面レベルをそろえるように人頭大程度の角礫を２段から３段積み上げている。積み方は小口面を意識しているものの、特に南側は乱雑で不揃いである。

この石積みに付随する遺物の出土は認められなかったが、２号石積みに直交状態にあり、しかも３号溝址を埋めることなく構築されていることを考慮すれば何らかの区画を意識して造られた近代遺構と推定される。

２号石積み・胴木遺構・３号溝址（４・５図）　これらの遺構は一体をなして機能するものと考えられる。調査地の



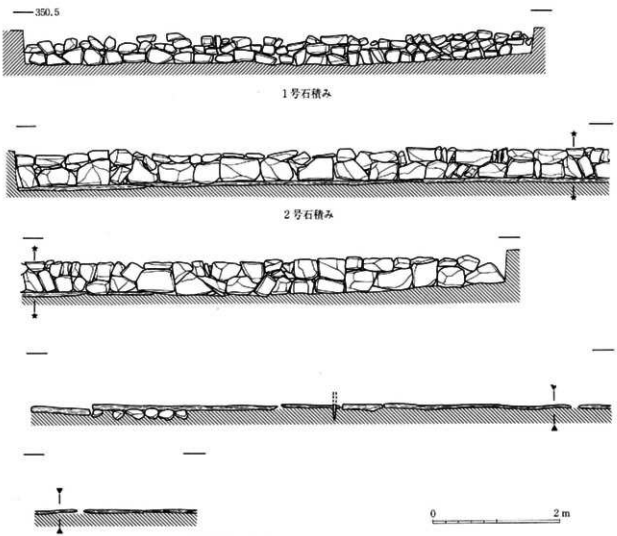
３図　松代小学校校庭地点遺構分布図（１：250）



4図　石積み・溝址・土坑実測図（1：100）

北端に位置し、東西方向の石積みで両端は調査区域外に延びているため全長は不明である。調査で検出した規模は全長16m・立面の高さ50cm内外の規模である。積み方は南面をそろえ、胴木上に２段積みを基本にしている。下段には広口平坦面の角礫を据え、上段は小振りな石を小口積み状に配置して上端面のレベルを合わせる。40cm程離れた対面にも石積み様遺構が存在していた可能性が高く、胴木が11mにわたり並行して残存していた。また、胴木上にも配石が一部に認められ、２号石積み間に崩落したとみられる石材が全面に散在していた。２号石積みと胴木遺構間は深さ15cm程の溝（ＳＤ３）になり、これらは一帯の排水機能を有する溝の遺構と考えられる。しかし、２号石積みと１号石積み・胴木遺構とに積み方や配石の石材の規模に大きな相違がみられる。１号石積みが先行して構築された後にこの石積みを意識して溝を造ったり、２号石積みを構築した可能性が高い。３号溝址は１号石積みの北端に延び、胴木遺構も延長すると同位置にたどり着く。

遺物（11図41～49･51～53）　瓦片が多量に出土している。２号石積みの上部に開い塀等の工作物があり、そこに葺かれた瓦の残欠と考えられる。特徴ある瓦片を抽出する。41～43は鬼瓦と推定される。41の瓦当面には結び雁金、42には六文銭が浮文され、背景面には雑な刺突文を全面に施す。43は雲形文の一部分であろう。44～46は六文銭軒丸瓦である。45の六文銭は端整鋭角で型作りと思われる。47～49は結び雁金文軒桟瓦軒丸部で、51～53



５図　石積み・胴木列立面実測図（１：60）

のような軒平部左端部に接着する。51～53は山形文軒平桟瓦である。

(2) 溝　址

小学校校庭地点から11条の溝状遺構を確認したが、溝としての機能を有しているものは２号と３号溝址の２条にすぎないし、３号溝址を除いて出土遺物も確認されない。

２号溝址（４図）　２号石積みの北に並走する。幅0.8～１m・深さ８～12cmの浅い溝で、断面形態は鍋底状を呈する。用途は不明であるが、２号石積みと関係ある遺構と考えられる。

石積み検出面の溝址（３図）　１号石積みと直交して７条確認されているが、近代土坑と重複関係にあるものの、時代・規模や性格等知りえず、後世の耕作による溝状遺構の可能性も捨てがたい。

(3) 土　坑（３・４図）

現地表下130cmから掘り込まれ、石積み下面にあたる175cmに達する。平面形態は並列または直交状の溝状を呈する。13基確認されこの内の１～10号土坑内は石炭ガラが充填されていた。また、繰糸用陶製鍋等が投棄されており、近代製糸業により排出された廃棄物処理場として利用されていたことが窺われる。土坑の上層面には厚さ20cm程の土坑掘削土（暗緑褐粘質土）が覆い、意図的に埋めている。前文の上層で触れた上層は全て近代以降の盛土または削平造成土といえる。

Ⅲ－１　１号石積み上面

Ⅲ－２　１号石積み（北より）

Ⅲ－３　１号石積み立面（部分）

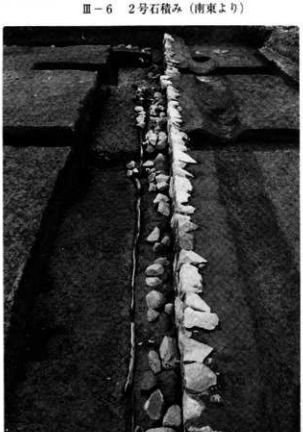
Ⅲ－４　土坑群

Ⅲ－5　2号石積み（南より）

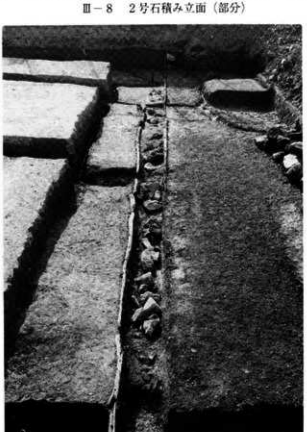
Ⅲ－7　2号石積み立面（部分）

Ⅲ－6　2号石積み（南東より）

Ⅲ－8　2号石積み立面（部分）



Ⅲ－9　2号・3号溝址



Ⅲ－10　3号溝址

2　花の丸御殿跡地点

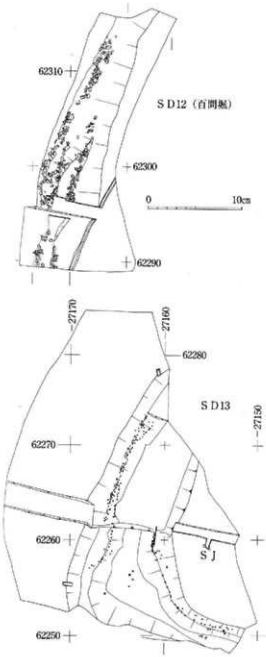
調査地にあたる花の丸および百間堀（ＳＤ13）は、寛保２年（1742）の大洪水を契機に宝暦元年（1751）頃に行われた千曲川の移設により城地を拡大し築かれたものとされている。調査の結果、百間堀の一部、花の丸に先行する曲輪を外周する堀（ＳＤ12）・土壙墓を検出した。また、花の丸御殿に直接結び付く遺構の存在はなかったものの、花の丸造成時の整地層が確認できた。

(1) 溝　址（堀跡）

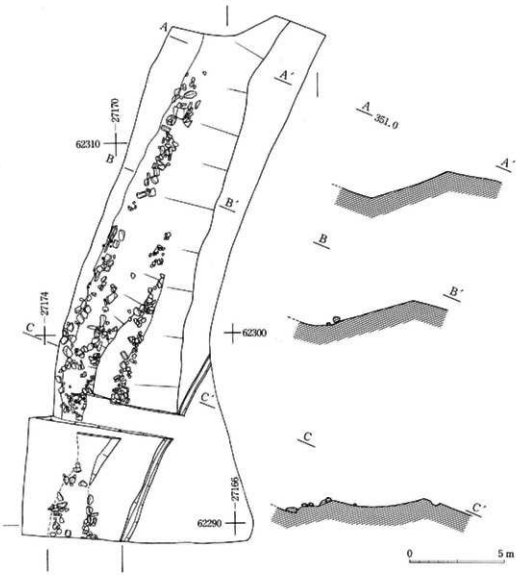
12号溝址（百間堀）（７図）　調査地の北側に位置し、旧城郭域北部で三の丸と百間堀の境界に沿う南北に走る市道の延長上から検出された。この道路以西を百間堀とするこれまでの想定を裏付ける結果となった。調査で露見できた部分は、花の丸の堀肩と底面に至る部位のみで、全体の形態や規模等は不明である。堀肩から底面までの比高差は確認遺構のうち南で3.4m・中央で3.5m・北で3.3mを測る。南側堀斜面の中央付近に角礫が乱雑に埋め込まれているが北側には認められない。堀水面の汀線に対する対応であろう。さらに、その下方と底面との屈折部にも角礫の列石状集石が確認されるが石積み形態にはならない。検出遺構中央付近の底面に木杭や胴木の痕跡が残存する。

遺物（９・10図１～30、11図50・55・58）　出土状態は小破片のものが多い。１・２は在地産の土器皿（カワラケ）である。３は伊万里染付皿で、４は瀬戸・美濃の擂鉢である。共に17世紀前半に比定される。５・６は伊万里染付皿、７・８は伊万里青磁碗、９・10は唐津灰釉碗であり、17世紀後半に年代が求められる。11～17は伊万里の碗・皿、18は産地不明の鉄釉皿、19は瀬戸・美濃の灰釉鉄釉掛分碗、20は在地産の灰釉鉄釉捏鉢である。時代は江戸時代後期の18世紀末～19世紀前半に比定される。28～30は伊万里産の染付であるが、製作年代は不明である。21～27は19世紀後半以降（近代以降）の陶磁器である。瓦の出土量は少なく、均整唐草文軒平桟瓦（55）・３号溝址と異なる結び雁金文軒桟瓦軒丸部（50）及び丸瓦（58）がある。この他に底部堆積層から漆塗り椀・お膳の脚、小形の曲物の底、半切桶、下駄等の一部が出土している。

13号溝址（堀）（８図）　平面的には百間堀の内側を巡る位置から検出された。堀の堆積土層は下層に茶褐色を呈し



６図　花の丸地点遺構分布図（１：400）

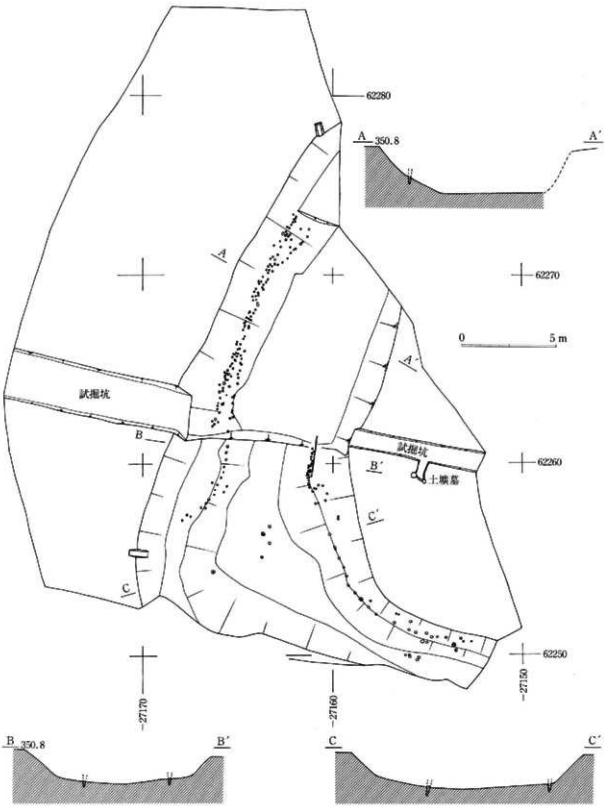


7図　12号溝址（百間堀）実測図（1：200）

Ⅲ－11　12号溝址（北より）

Ⅲ－12　12号溝址（南より）

植物遺体を多量に含む粘質土層と、上層に黄褐色を呈する微粒砂層に大別される。前者が通常の堆積で、後者が洪水時の堆積と判断される。さらに、洪水層の上部は花の丸造成時の整地層が覆い、意図的に堀を埋め平坦化している。寛保2年の洪水後花の丸を築いたという文献記録と合致する。堀は百間堀とほぼ並行して掘られており、



8図　13号溝址実測図（1：200）

調査地南端で直角に屈曲し、幅を狭める様相を示している。両端共に終結または接続遺構は不明であるが、堀の方向から北端は百間堀に接続する可能性が高い。堀の平面規模は堀肩間9.5m前後・屈曲部12.2m・調査地南側の最小幅3.5mを測る。深さは原初の底面まで調査したＡＡ′部で2.4m、２次底面のＢＢ′部で1.7m・ＣＣ′で1.9mになる。外側斜面の中段には屈曲部まで多数の木杭の痕跡が残存していた。内側斜面でも同位置に木杭列が認められ、外側のものより残存形態が良く、太めの木材が使われており、全周するようである。石積み石材の痕跡が全くないことからこれらの木杭の用途は土留め用と考えられる。

遺物（10図31～39、11図56・57）　出土量は少ない。31は平安時代の所産と思われる瓦塔屋根部の破片である。32は碗、33も碗と推定される器種で、共に17世紀前半の伊万里産の染付である。34・36は伊万里染付蓋と碗、35は京焼の灰釉碗で18世紀末～19世紀前半の所産である。37・38は近代以降の磁器である。39は在地産の焼物と推定されるが、年代は不詳である。瓦の出土量も少なく、均整唐草文軒平瓦（56）と丸瓦（57）がある。この他に弥生時代後期の甕、古墳時代後期後半の土師器甕・坏、中世内耳土器が出土しており、花の丸地域は古代の遺跡の可能性がある。

Ⅲ－13　土層（白色部洪水層）

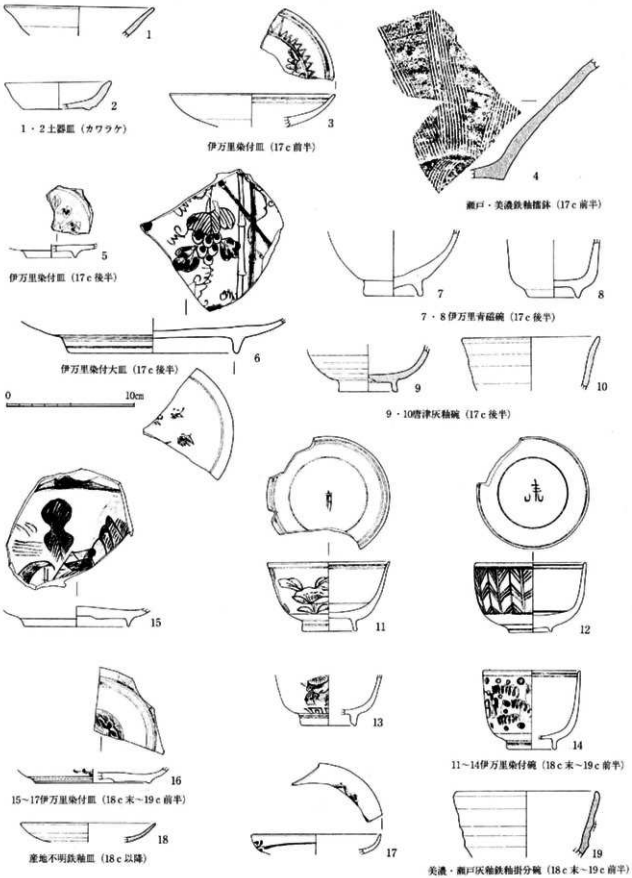
Ⅲ－14　13号溝址（東より）

Ⅲ－15　13号溝址（南より）

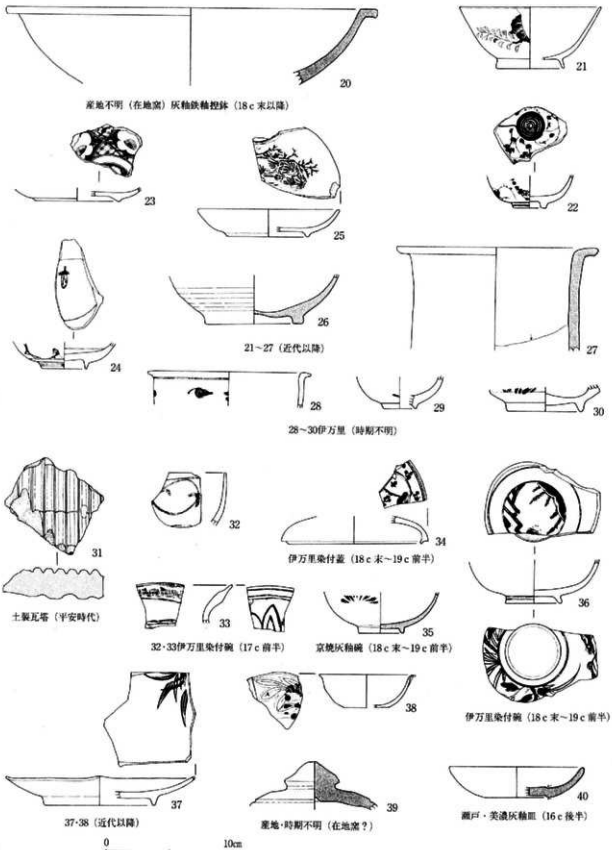
Ⅲ－16　13号溝址木杭

Ⅲ－17　13号溝址木杭

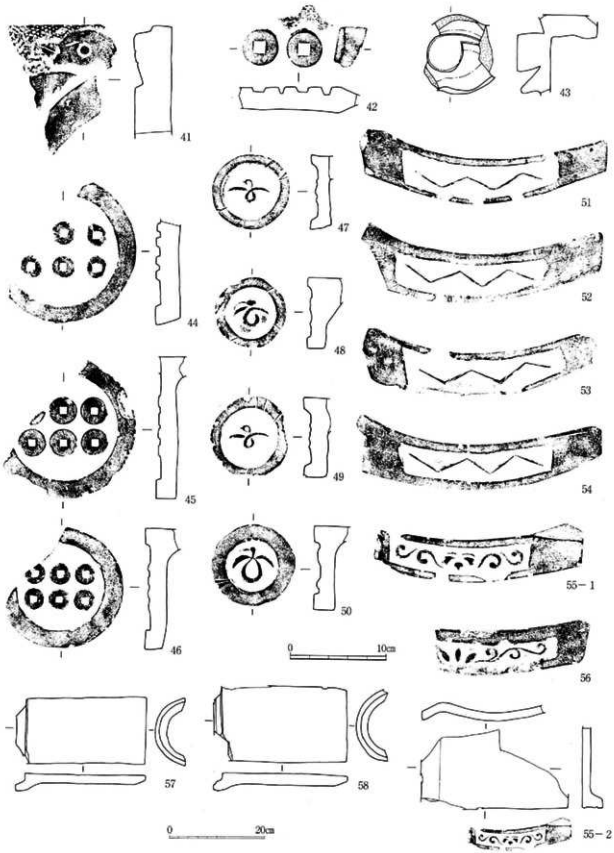
Ⅲ－18　13号溝址木杭



9図　12号溝址出土焼物実測図（1：3）



10図　12号溝址（20～30）・13号溝址（31～39）・土壙墓（40）出土焼物実測図（１：３）



11図　3号溝址（41～49・51～53）・12号溝址（50・54・55・58）・13号溝址（56・57）出土瓦拓影・実測図
（1：4、57・58・55－2は1：8）

(3) 土壙墓（ＳＫ13）（12図）

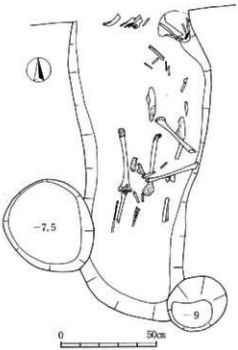
13号溝址の内側に位置し、試掘坑の調査の際発見した。形態は不整隅丸長方形を呈するものと思われるが、長軸の規模は不明である。単軸は55～75cm・深さ８cmを測る。この墓の性格は不明な点が多々あるが、曲輪内に位置することから屋敷墓と考えておきたい。なお、南両脇に円形土坑が掘り込まれているが本遺構と関係のないもの思われる。

人骨の鑑定ついて、西沢寿晃氏（信州大学医学部第二解剖学教室）より「松代城整備事業地内出土の人骨について」の考察をいただいている。ここではまとめの部分のみを掲載する。

［骨の形質から］　骨の遺存程度は極めて不良で、形質的な特徴の多くは指摘できない。しかし、２個の頭蓋骨はその頑丈さにおいてかなりの差異が見われり、男性１体とともにやや華奢な形態を有する１体の性別は明確でないが、歯の咬耗度から壮年期に属する年齢が推定できる。

［葬法ついて］　２体の遺骸はともに体幹各部の骨はほとんど欠失して、わずかに上肢骨の存在が推定される程度である。なお、頭骸骨１号（右側）の上部やその周辺に上腕骨や尺骨などが、おそらく挙上し折り曲げられた位置で存在するのが特異である。また骨盤部分もわずかに痕跡的である。下肢骨のうち大腿骨３本が認められ、うち２本は同一個体のものである。右側は股関節からやや左前方に曲げられ、連結する脛骨は膝関節ではほぼ直角に屈曲されている。左側は下方へ真直ぐに伸ばされ、腓骨・脛骨もこれに連結して伸展する。以上の両側大腿骨に挟まれた中間の位置に、異個体のものであるやや細く華奢な形状の右大腿骨が縦位置の方向で存在している。その他、これらの下肢骨に続く足骨も認められるが、わずかに骨片状に残るのみである。墓壙に埋葬された２体の遺骸は、頭部を上縁に近く並べて揃えられるが、体幹から上下肢は密接しながらもかなり散在的な位置関係を示している。伸展葬に近い姿勢での同時埋葬の可能性が推察される。（以上、西沢報文）

遺物(10図40)　覆土中より瀬戸・美濃系の灰釉皿が出土しているが、残存率が４分の１に満たない破片である。時代は16世紀後半に求められ、陶磁器類では最も古い年代である。



12図　土壙墓実測図（１：20）

Ⅲ－19　土壙墓

Ⅳ 結　　語

松代小学校校庭調査区内の所見による限り、２号石積みと３号溝址を除き他の遺構は全て１号石積みにより規制される区画内で収束する。また、遺構の検出高と１号石積み高を考慮しても同時に存在していたとしても矛盾をきたさないことから、１号石積みは土坑群および溝状遺構群を区画する事を目的として近代以降に積み上げられた遺構といえよう。

２号石積みと３号溝址は松代城と関係ある遺構と考え、特に２号石積みは桜の馬場の南限を区画する施設と推定する。近世初頭に築城され、その後城郭域の拡張が行われた松代城の南限を確認したことになり、松代城研究にあたりこの意味するところは大きい。

花の丸地点の調査では、百間堀南端遺構の確認や花の丸築造について文献資料の記載を遺構や遺物面からも裏付ける成果が得られたことは重要である。また、百間堀より早く構築された堀（ＳＤ13）の検出は花の丸に先行する曲輪であることを確認できた意義も大きい。さらに、松代城南西域の平面形態の一部が確認できたことにより、これまで他地点での調査成果とあわせ不明確であった松代城縄張が復元することが可能になったことも重要な成果といえよう。

瓦類の出土状況をみるに、２号石積み上には築地様の塀が存在した可能性が高いものの、12号・13号溝址周辺には瓦を葺く建築物の存在は薄いものと思料される。また、今回調査した地点での食器等の焼物類の出土量は少なく、小破片の物が多いことからも周辺に居住用施設等が存在しないものと考えられる。松代城（花の丸）に関与する焼物類では12号溝址から肥前系（伊万里）の染付が多く出土している点注目される。時代的・量的には土壙墓出土の瀬戸・美濃産の皿が16世紀後半に位置し、17世紀前半と後半のものが若干、18世紀代のものが欠落し、18世紀末～19世紀前半の焼物が主体をしめ、近代に続く。僅かな出土資料からであるが、調査地周辺は1770年花の丸に御殿を移転し、1873年花の丸焼失まで居住域であったことを裏付ける。

Ⅳ－１　平成５年度従事者

Ⅳ－２　平成６年度従事者

2

3

4

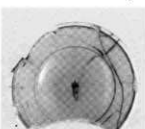
5

7

8

6

9



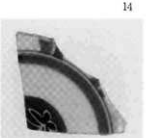
13

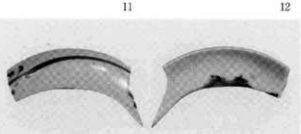
14

11

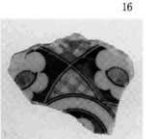
12

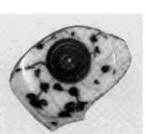
15

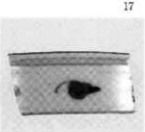

16


17

19


23


22


28

30

31

33

32

34

35

36

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

57

55

56

報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうせき
書名	松代城跡
副書名	国補神田川改修地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第73集
編集者	矢口忠良・前島卓
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414　TEL026－284－0004
発行年月日	1995年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松代城跡	長野県長野市松代町（ながのけんながのしまつしろまち）	20201	G－032	36度33分51秒	138度11分50秒	19930301 / 19940714	2000㎡	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松代城跡	曲輪跡他	近世 近代	堀跡・石積み・土壙墓	近世陶磁器 製糸工場廃棄物	百軒堀およびこれに先行する堀跡の確認

長野市の埋蔵文化財第73集

松代城跡

平成7年3月24日　印刷
平成7年3月30日　発行

編集　長野市教育委員会
発行　埋蔵文化財センター
印刷　ほおずき書籍株式会社